



「月夜にひばりが足を焼く」。ひでりが続くと、夜、木々の枝にとまったひばりが足を焼くほどに地表が熱く熱せられている様子が表現されています。

昔、三好市、阿波市などでは、吉野川沿いにありながらも、田畑が河岸段丘の上にあるために、平地の底を流れる吉野川の豊かな水を利用することができませんでした。このため、ひでりが続くと、干ばつに苦しめられてきました。資金や技術が十分ではない時代に、人々ができることは神様をお願いすることでした。

旧池田町では農民が八幡神社に集まって、雨乞いの祈とうや踊りをしました。大きな「はんぼう」(底の浅い大きな飯びつ)に水を満たし、そのまわりに、みんなで、蓑笠姿で集まり、神官がお祈りの神事をした後、はんぼうの水を笹の葉に付けては散らしながら、歌い踊り回りました。水がなくなると、うちわを持った者と入れ替わり、前後にふりながら、炎天下に何時間も踊り続けたものです。

その時、みんなで歌を歌いました。その一節に「六月やひでり続きで、ほこり立つ」という句があります。



### 背景

明治から大正にかけて、三好市では夏がくると毎年のように干ばつが続き、三年に一回ぐらいは、とうもろこし・たかきび・あわ・こきび等が畑で黄色くなり、田は亀の甲のようにひび割れて、大きな被害を受けていました。この頃は、灌漑用水として、馬路川や馬谷川から水をとっていましたが、夏になると水量が少なくなり、高台などでは、飲料水の井戸や湧水も枯れてしまい、手のほどこしようがありませんでした。このため、農民は雨乞いをして、神様に雨降りの祈願をしました。

### アクセス 八幡神社

- JR阿波池田駅より西南西へ直線距離約2 km
- 三好市池田町白地
- 緯度経度 北緯34度01分01秒, 東経133度46分48秒

